

ラディカル精神分析と反資本主義的实践

(Radical Psychoanalysis and Anti-Capitalist Action)

イアン・パーカー (Ian Parker)¹⁾、(訳: 牧瀬英幹)²⁾

¹⁾マンチェスター大学教育学部, ²⁾中部大学生命健康科学部作業療法学科

【目次】

日本の読者の皆様へ

序

第1章:なぜ私たちは苦しむのか

第2章:私たちは何者なのか

第3章:精神分析は今どこにあるのか

第4章:精神分析にはどのような意味があるのか

第5章:私たちはそこから何をつくり出せるのか

【日本の読者の皆様へ】

この小さな書物は、社会変革を目指すマルクス主義の人たちに対して、精神分析がその実践において重要であることを理解してもらうために書かれたものであり、デイヴィッド・パヴォン＝クエヤルと私が、広い意味で捉えられた進歩的な変革運動が精神分析を真剣に受け止めるべきであるという主張を展開した『Psychoanalysis and Revolution』における議論を、分かりやすく紹介する入門書となっています。私たちは、精神分析の四つの重要な概念、すなわち「無意識」「欲動」「反復」「転移」に焦点を当て、それらが実践において有用であると考えました。第四の概念である「転移」とは、精神分析の臨床場面において、無意識的な欲動が反復されるかたちで経験されるものです。したがって転移とは、私たちの生には無意識的な次元が存在すること、私たちが強迫的に駆動されていること、そしてそれが個人的・政治的な生の反復的な性格を支えていることを、凝縮して示す概念です。私たちは、精神分析の臨床を布教的に宣伝したいと考えていたわけではありません。しかし、私たちが論じてきた四つの要素が一つに結びつく場こそが、この「転移」なのです。

デイヴィッドと私は、ともに精神分析において、ある特

定の理論的軌道をたどっています。それは、フランスの精神分析家ジャック・ラカンが示した方向性です。ラカンは、発達の段階や年齢ごとに固定された枠組みや、英語圏の精神分析や主流の心理学の教科書にしばしば見られるような、個人の人格を心理学的あるいは疑似精神医学的に描き出す奇妙で誤ったイメージから重心を移すべきであると主張しました。そしてその代わりに、人間を「語る主体」として捉え、その言語との関係に注目することへと関心を移しました。これは、精神分析が「語ることによる治療」であるという考えを受け継ぎ、さらに発展させるものであり、私たちをさまざまな言語や文化、さらには歴史と、より密接に結びつけるものでもあります。デイヴィッドは、この点について次のように主張しており、私もそれに同意しています。それは、無意識とは個々人の頭の中に隠されている何かではなく、私たちの外部に、すなわち言語の中に、人間として生きるために必要な集合的な空間の中に存在しているものだ、ということです。

また、デイヴィッドと私は、ともにマルクス主義者でもあります。そのため私たちは、この特定の政治的分析のあり方について、いっそう慎重に扱い、行き過ぎないよう配慮してきました。マルクス主義そのものは、一部の支持者たちが想定するように、社会の文化的・政治的な上部構造の背後にあるとされる「経済的基盤」だけに還元して説明するような単純化された見方、すなわち素朴な経済決定論よりも、はるかに豊かなものです。同時にマルクス主義は、私たちの生活のあらゆる側面について、どのように考えるべきかを指示するような壮大な体系よりも、はるかに控えめなものでもあります。そうした体系とは、いわゆるマルクス主義国家において官僚機構の装置の一部をなしていたイデオロギー的な枠組みであり、そこではマルクス主義そのものが、すべてを包み込む包括的

な世界観へと変えられていました。マルクスが行ったのは、新たな政治経済学の構築ではなく、政治経済学に対する批判でした。私たちが強調すべきなのは、この「批判」の側面なのです。そして、この点を踏まえたうえで、私たちは、世界各地で生まれてきた、権力に対するさまざまな異なる挑戦が交差し合う状況に対して、敏感でありたいと考えました。それらは、ときにマルクス主義に基づくものであり、ときにはそうでない場合もあります。だからこそ、私たちは本書の中で、解放運動に言及したのです。

本書『Radical Psychoanalysis』は、私自身によるこれらの思想への入門書であり、社会変革を目指すマルクス主義について明確に言及しています。精神分析にはラディカルな歴史があり、それは政治的にも有用でありうるものであり、ラディカルな人々や解放のために活動する人々にとって役立つ可能性をもっています。私はここで、精神分析が普遍的に真理であるかどうかという問題については、あえて正面から取り上げていません。私は、精神分析の概念を検証しようとする、疑似科学的な実証研究には関心がありません。そうした試みは、精神分析を別のもの、すなわち心理学や精神医学、あるいはマニュアル化された心理療法へと変えてしまうことを目的とした行き止まりのプロジェクトであると考えています。また私は、精神分析がすべての時代において普遍的に正しいものであると主張したいとも思っていません。精神分析は、ある特定の歴史的時点において生み出されたものであり、世界観へと仕立て上げられるべきものではありません。この点については、フロイト自身も警告していました。重要なのは、これらの思想がどのように機能してきたのか、そしてどのように実践の中で用いることができるのか、という点なのです。

さて、ここで示されているのは、これらの思想をまったく異なる文脈、すなわち日本という場において、それらが有用であるかどうかを確かめるための、もう一つの試みです。そして私は、本書の翻訳という作業を快く引き受けてくださった牧瀬英幹氏に、心から感謝しています。本書は、そのまま同意するための本ではなく、むしろ議論し、批判的に向き合いながら、日本においてそれをどのように生かしていくことができるのかを見出すための書物

なのです。

2026年2月 マンチェスターにて
イアン・パーカー

【序】

いまや、あらゆる立場の政治家たちが「メンタルヘルス」について語っています。彼らは自らの苦しみを語り、問題を是正するための資源を増やすと約束します。しかしその一方で、福祉サービスは削減され、人びとは「自分の問題は自分で解決せよ」と言われ、国家は異議申し立てに対処するためにその権力を強化しています。苦悩が増すにつれて、怒りもまた増大します。その怒りの一部は資本主義に向けられ、そして一部は自分自身に一さらには自分の内側に向けられます。こうして、この病んだシステムは、私たち自身をも病ませるのです。本来ならば、この腐敗したシステムを打倒するために使われるべきエネルギーは、むしろ私たち自身の連帯的な闘いを妨害する方向へとねじ曲げられてしまいます。主流の「メンタルヘルス」や「ウェルビーイング」のプログラムは、私たちの思考を変えることに焦点を合わせ、「幸せになりなさい」「環境に適応しなさい」と繰り返し促します。しかし、そこには別の可能性があります。その可能性は、政治的行動—反資本主義的抵抗をはじめとする多様な政治的闘争—を通して現れます。そこにおいて、ラディカル精神分析は私たちの同盟者となりうるのです。けれども、それを真の同盟者とするためには、私たちは精神分析とは何であるのか、何になりうるのかを知らなければなりません。今とは違う「異なる世界」は可能です。そして、精神分析は、個人的にも政治的にも変化の可能性を切り開く道を示しているのです。

【第1章】なぜ私たちは苦しむのか

人間は苦しみながらも、あらゆる困難に抗して生き延び、さらには成長していきます。文化や歴史的な時代の違いによって、その苦しみ方も、生き延び方も、大きく異なります。私たちはいま、資本主義という病んだ世界のもとで苦しんでおり、その苦しみはきわめて固有のものです。その現れ方は一人ひとり異なっています。だからこそ、苦しみに対する精神分析的アプローチは、私たち一

人ひとりの声に耳を傾け、それぞれの苦悩や、この世界の中で生き、かろうじて生き延びている多様な生のあり方を丁寧に聴き取るのです。

私たちは、一人ひとりの苦悩の複雑で隠されたあり方を完全に理解できるとは言えません。しかし確かなのは、病んだシステムとしての資本主義が、世界を破壊しながら私たちをすり減らしているということです。資本主義という政治経済的支配のシステムは、性差別や人種差別などの他の抑圧形態をもさらに強化します。そして、世界を変える力をもつはずの私たち自身を、むしろ自らの敵へと変えてしまうのです。その結果、私たちは自らの苦悩にしがみつきながら、その原因を他者に転嫁してしまうのです。

分断と葛藤

私たちは、生き、働き、創造的で幸福に暮らせる世界を望んでいます。けれども現実には、私たちは引き裂かれ、互いに切り離されています。その一方で、この破壊的で搾取的な仕組みから利益を得ている者たちは、もみ手をしながら私たちにも同じことをするよう仕向けています。権力や特権の地位にある人々は、私たちが他者を踏みつけてでも上に這い上がろうとすることを望んでいるのです。

彼らが差し出す偽りの約束はこうです―努力して上へと昇り、苦しい仲間を見捨てれば、幸福になれる、と。もっと多くのお金や権力、特に他者を支配する力を手に入れば、苦しみから解放される、と。そう信じさせることで、彼らは私たちがこの世界の在り方に誤りがあると気づく力を奪おうとしています。この世界が虚偽の上に築かれているという認識そのものを、消し去ろうとするのです。「私たちは変わらない」と語るイデオロギーは、まさに嘘の体系です。私たちが変わることができないなどというのは、真実ではありません。私たちは、別の在り方を選ぶことができるのです。

このような分断と葛藤は、資本主義に固有のものであり、それこそが疎外なのです。この疎外は深刻な影響を及ぼします。そして精神分析は、この疎外に伴う苦悩の深さや、絶望がいかに私たちを麻痺させ、変革へのエネルギーを互いへの憎悪へと変えてしまうのかについて、

洞察を与えてくれるのです。

競争としての疎外

私たちはすでに、労働力という商品を売買する市場において、互いに分断されています。労働力とは、賃金を得るために私たちが売らなければならないものであり、生き延びるために売らざるをえないものです。労働力には身体的なものだけでなく、精神的なものも含まれます。例えば、ソフトウェア企業における知的労働は、しばしば肉体労働よりも上位に置かれますが、実際にはそうではありません。しかし、その「自分は上だ」という感覚こそが、労働力を競って売る世界―すなわち、互いを疎外し合う競争社会―の一部をなしているのです。私たちは職を得るために競争し、「外国人労働者が自分たちの仕事を奪う」と言い聞かされては、彼らを敵視するよう仕向けられます。そして、楽な仕事をしているように見える人々に嫉妬や憤りを抱くようになるのです。

このように、他者との競争としての疎外は、私たちを自分という小さな個のなかに閉じ込め、他者から切り離された個人という身体の狭い世界へと追い込みます。こうして私たちは、「大切なのは個人の努力と成功だけだ」と信じ込むようになるのです。これこそがイデオロギーです。それは虚偽に満ちた、自己破壊的な世界であり、内面に閉ざされた私的世界です。そこでは「重要なのは私だけ」「自分にとって良いことだけが価値がある」と信じるようになります。精神分析がいう「自我」とは、このような自己完結的な「私」のことを指します。一部の精神分析家は、自我を強化し、社会に適応させ、私たちが何とか生き残れるようにし、競争に耐えられるように助けようとします。しかし、より根源的な精神分析は、それだけが私たちのすべてではないことを思い出させてくれます。

私たちは、他者との関係のなかで、共にあることで自分自身になるのです。精神分析は、私たちがどのようにして他者との関係を通じて自己感―すなわち「自我」―をつぎはぎ的に形成していくかを示しています。初期の人間関係はとりわけ重要ですが、この過程は生涯を通じて続きます。私たちは身近な人々から、あるいはメディアからも、言葉遣いや表現、しぐさなどを借り取りながら、自分という存在を編み上げていくのです。

しかし、今とは違う「異なる世界」もまた可能です。そして、別の人間であるあり方もまた可能です。私たちは他者と共に存在することで、他者のあいだに存在してこそ、自分であることができるのです。競争という疎外を乗り越えるためには、共同行動としての闘いが必要なのです。

自らの身体からの疎外

精神分析は、資本主義的労働の世界におけるこの悲惨な他者からの分断が、同時に私たちを自らの身体からも引き離していることを示しています。私たちはそれぞれ、自分という殻の中に閉じ込められ、労働力を売らなければなりません。そしてその労働力は、職場へと私たちを運ぶ身体の中に、あるいは賃金を得るために何かを生み出さねばならない脳の中に存在しています。こうして私たちは、他者が壊れてしまうのではないか、裏切られるのではないか、あるいは敵に回るのではないかという恐れを、常に抱えるようになるのです。

私たちの身体的な「健康」は、「精神的な健康」と深く結びついています。身体がうまく動かないこと、思いどおりに働かないことに対して、不安や抑うつを感じるようになります。そして私たちは、この腐敗したシステムのもとで、健康でない身体をもつ者がいかに早く「役立たず」とされ、排除され、使い捨てにされていくかを、日常的に目にしています。

このようにして、身体からの疎外は毒のようなものとなり、私たちはしばしば自らの苦悩を、身体を通して表現するようになります。私たちは、そうして心身をすり減らし、苦しみに囚われてしまった友人や家族を知っています。彼らの身体はまるで、「自分の声を聞いて欲しい」と叫んでいるかのようです。

精神分析は、こうした疎外や苦悩が、私たちの叫びたい思いをいかに封じ込めてしまうのかを聴き取ろうとします。苦しみは身体の中に閉じ込められ、やがて身体的な症状として姿を現し、苦悩の代わりに語り出すのです。あるいはその苦悩が心のなかに閉じ込められ、「自分は失敗した」「自分には価値がない」といった自己破壊的な思考が頭のなかをぐるぐると回り続けることもあります。正常な身体とはどのようなものか、何が弱いあるいは「異常だ」とされるのか—そうした観念やイメージが、私たち

の症状をさらに悪化させます。例えば、女性が弱く非合理的で、苦情を訴えると「ヒステリー」と見なされるというイメージ、同性愛が「何かが間違っている証拠」とされる偏見、黒人の身体が「野蛮」「未開」と見なされる差別的表象—これらはすべて、個人の症状が社会的な症状としても作用するように仕向けているのです。こうして私たちは、自らの身体の中に、さまざまな形の抑圧を刻み込みながら生きることになります。身体そのものが、抑圧を受けける牢獄となってしまうのです。では、どうすれば私たちは、その牢獄の中で声を上げ、それを聞いてもらい、そして自らを閉じ込めている条件を変えていけるのか—この問いに答える道筋を照らすのが、ラディカル精神分析なのです。

自然からの疎外

しかし、それだけではありません。利潤追求と少数者の富の集中を基盤とする経済システムとしての資本主義は、私たち一人ひとりの労働力を搾取するのと同じように、自然をも搾取しなければ成り立たないのです。私たちは自然から切り離され、世界はもはや私たちの手に負えなくなっています。地球は燃えています。一部の科学者は、現在の時代を「人新世」と呼びます。まるで人間の出現と、他の動物や自然への支配こそが、気候変動や環境破壊の根本原因であるかのように。しかし、それは正しくありません。

人間による破壊は、権力関係、自然の搾取、そして私たち全員を蝕む抑圧と疎外の帰結なのです。ここ数百年において、この破壊的傾向を極度に加速させたのは資本主義システムそのものでした。したがって、私たちはこの時代を「資本新世」と呼ぶべきでしょう。問題なのは人間そのものではなく、「資本主義」です。人間は協力して働くことができ、その協働こそが、資本主義を打倒し、より良い共生のあり方を築くために必要なのです。

自然の支配は、この資本主義的構造の中心にあります。資本主義は身体や土地から価値を抽出し、それを商品化して売り出すことで成り立っています。自然を支配しようとする欲望は、ときに制御不能な自然への恐怖として表れ、ときに自然への「回帰」という幻想的な願望として現れます。自然と一体化すれば問題が解決するという

そのロマン主義的発想は、私たちの自然からの疎外を癒すものではありません。確かに、私たちは自然と共にあり、他の生物たちと共に生きるべき存在です。ラディカル精神分析も、その方向性を支持します。しかし同時に、それが私たちを新たな罠へと導く危険もあることを見抜いています。

ラディカル精神分析は、自然からの疎外に対する診断を提示するだけでなく、私たちが自然を支配しようとしたり、逆に融合しようとしたりする際に陥る誤った道筋そのものをも明らかにします。私たちは自然に還るといった幻想から出発することはできません。これまでに築いてきた科学的・技術的成果をすべて放棄することもできません。世界の人々を養い、新たな気候条件のもとで生きていくためには、理性的で、共同的で、民主的に組織された能力に依拠するしかないのです。それはすなわち、私たちよりも強大な自然の力に対する恐怖と向き合い、何が可能で何が不可能かを冷静に見極めることを意味します。そして同時に、私たち一人ひとりが自然の一部であることを認めなければなりません。私たちは自然を理解し、変容させる存在であり、単なる動物的本能に突き動かされる存在ではありません。私たちは動物でありながら、それを超えた存在であり、互いに、そしてこの世界に対して政治的責任を負う存在なのです。

創造性からの疎外

私たちは、自らがつくり上げたこの世界を変えることができます。確かに、この世界は現にあるこの形をとっていますが、それが全てではありません。世界の形は、各時代の支配階級の利害によって方向づけられてきました。そして今日では、利潤追求の衝動によってそれが形成されています。私たちは、自らの望む条件のもとで世界をつくることはできません。人間としての創造的な力—もし私たちが資本主義に抗して集団的に行動するならば、この混迷から抜け出すことを可能にする力—は、労働力を買い取る者たちによって操作され、歪められています。彼らは私たちの創造の成果を奪い取り、それを商品として売り出すのです。

すなわち、私たちは自らの創造性から疎外されています。私たちが創造的に生み出したものは奪われ、その

搾取は資本主義の中心において、さらに深いかたちで行われています。私たちが何かを創り出すその瞬間にすでに、それは販売のためのものとして利用されてしまうのです。価値あるものは「交換価値」へと変えられ、私たちの労働は商品へと転化されます。

資本主義のもとでは、私たち自身の労働力だけでなく、身体さえも、さらには自然そのものの諸要素までもが商品化されます。私たちの生は売買可能なものとなり、人間としての存在の核心において、疎外が作用しているのです。本来、私たちは創造的な存在です。他者とともに生き、愛し、この世界を理解し、意味づけながら生きています。けれども、私たちの人間的本性のこの側面は、体系的に歪められています。この「創造性からの疎外」という体系的な歪みこそが、多くの精神的苦悩の根にあります。そしてその精神的苦悩は、しばしば身体的苦痛や実際の病として現れるのです。

精神分析もまた、この問題に巻き込まれています。苦悩のために助けを求めたことのある人なら、それをよく知っているでしょう。精神分析が一種の「個人向けの」治療として提供されるとき、それもまた一種の商品と化します。話をし、聞いてもらうための空間は購入しなければならず、その空間を提供する専門家もまた、市場の力に左右されるのです。公的医療制度のなかでは、この一対一の精神分析的治療は高価であり、限られた人々にしか提供されません。しかも「患者」とされるのは、たいていすでにそのルールの中でうまく振る舞える人たちです。ラディカル精神分析は、こうした構造に肩入れするのではなく、変化とつながるためにこそ、創造的であらねばなりません。疎外に迎合するのではなく、それに対抗するための創造的な解決を見出すことが求められているのです。

オンライン上の疎外

いまや、私たちを他者そして自分自身から引き離す要素に加えて、私たちのコミュニケーションのあり方そのものが、私たちに逆らって働いています。世界に関する情報を得るために利用しているソーシャルメディアは、信頼できないだけでなく、しばしば矛盾に満ち、混乱をもたらします。オンラインでの相互作用は、私たちを巨大な競争的ゲームのような伝達空間へと引き込み、現実と

の関係を体系的に掘り崩していきます。まるで現実世界そのものが消え失せ、その代わりに、有害なメッセージやイメージが錯綜する競合的空間が広がっているかのようです。そこでは、一時的な安らぎや共同体感覚が得られることもあります。より多くの場合、孤立と不安が強まるのです。

「人間性心理療法」の一部の立場では、「自分の感情は自分の味方だ」と主張します。しかし、これは必ずしも真実ではありません。精神分析的な心理療法や精神分析の立場からすれば、私たちは常に自らの感情から隔てられており、言葉にしようとする過程でそれらから疎外されているのです。精神分析における「自由連想」は、まさにこの隔たりに気づき、感情が語られるなかでどのように変化していくかを観察する方法なのです。

大手メディア企業が最新モデルを売り込むために言うようなこととは異なり、あなたのスマートフォンは決して友人ではありません。それは情報を与えると同時に誤導し、さらなるマーケティングのためにあなたのデータを収集し、あなたの行動を監視します。この「デジタルな疎外」は、オンライン上の自己イメージを売買可能な商品へと変えてしまいます。それは、無数の陰謀論を許容し、世界の真実を暴くふりをしながら、私たちを不快で破壊的なミームの世界へと吸い込んでいく—そのような魔術的な電子メディア宇宙の一部なのです。

精神分析は、世界の本当の姿を暴こうとするものではありませんし、あなたが「本当は何を考え、何を想像し、どんな幻想を抱いているのか」を明らかにするものでもありません。むしろ、現実がいかんにして押しのけられ、「抑圧」されるのか、その働きのメカニズムに焦点を当てます。精神分析で私たちが学ぶのは、「無意識の中に隠された内容」そのものではなく、むしろ無意識との関係、そして抑圧という働きそのものなのです。

そのため、ラディカル精神分析は「エコ社会主義的」な立場をとります。これは、自然に還ることを人間文化の下層にある本来的で深いものへの回帰として単純に理想化する立場ではありません。むしろラディカルなエコ社会主義的精神分析は、他の生物種を尊重し、自然を尊重し、異なる関係性を築く—そうした世界を共に創り出すことを目指します。私たちは自然から疎外された流刑状

態の中に生きています。しかし、精神分析は、自然と敵対するのでも、単に自然に戻るのでもなく、自然と共に生きる方法を学ぶための道を開くのです。

生からの分離

ラディカル精神分析は、疎外に対する批判を提示することによって、さまざまな政治運動によってなされてきた資本主義批判を、いっそう深化させます。労働者階級の搾取、女性の抑圧、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クィアといった多様なセクシュアリティの病理化、障害のある人々の排除、さらに、動物を工業的に加工される食料としてのみ収奪される対象へと変えてしまうこと—このように多大な苦しみを生み出す生活の諸側面は、いずれも疎外によって結びつけられているのです。

疎外は、資本主義のもとにおけるあらゆる搾取や抑圧の諸側面をいっそう深めるとともに、私たちがそれに抵抗しようとするまさにその瞬間においてさえ、私たち一人ひとりをこの社会に縛りつけます。私たちは、この社会が腐敗していることを知っており、声を上げたいと願っています。しかし、多くの場合、私たちは恐れや孤立感、無力感にとらわれてしまいます。私たちは、どのようにして語るための場を見だし、その語りを、搾取や抑圧に抗する行動へと結びつけることができるのでしょうか。変革に向けた私たちの創造的で反抗的なエネルギーについて、精神分析は何を語り、それをどのようにして声として表現し、実践へと生かすことができるのでしょうか。

【第2章】私たちは何者なのか

分断と葛藤は、資本主義のもとですでに過剰な力をもつ者たちにとって、権力の源となっています。しかし、それらは同時に、私たち自身の力の源へと転換することもできるのです。資本主義というシステムは、「分断して支配する」という原理で動いています。人々を互いに対立させ、他者を排除する模範的労働者になるように煽り、移民や女性、その他の人々を責めさせるのです。人々は「自分は何かを欠いている」「何かを失っている」と感じるよう仕向けられます。そして、「もし十分なお金があれば、幸福をもたらす物を買える」と信じ込まされ、同時に「自

分の不幸の責任は誰か他の人間にある」と思われます。こうした仕掛けは無数にあり、私たちを、他者を傷つけ、そして自分自身をもさらに傷つける方向へと導きます。

精神分析は、私たちが何者であるのかを考えるための一つの道筋を与えてくれます。またそれは、分断と葛藤を力の源へと変えるための方法でもあります。確かに、私たちは他者や自分に対する即時的な反応から距離をとる必要があります。なぜなら、その即時的な感情が、しばしば本物の、深い感情のように見せかけながら、実際には私たちを出口のない混乱へと導くことがあるからです。資本主義のもとでは、「感情」そのものもまた商品化されてしまっています。すなわち、他のあらゆる生の側面と同様に、感情も売買の対象となっているのです。

愛情・魅力・欲望といった感情は、憎しみ・嫌悪・怨恨といった感情と同様に、人間の根底にある本性的な性質から自然に生じるものではありません。それらは、私たちが生きている文化のもとで組織化された感情なのです。その文化を通して、私たちは「人間であること」を学びます。そして資本主義のもとでは、これらの感情もまたイデオロギーの一部として構築されています。それは、世界の仕組みや自分の位置づけについて私たちを誤らせる偽りの観念です。私たちは「いつまでもこのままだ」「世界は変わらない」と思い込まれるのです。

葛藤と両義性

政治的行動は、支配的イデオロギー—すなわち、支配階級の特権や権力を、あたかもそれが正常で自然なものであるかのように正当化し、維持する一連の観念体系—から私たちを引き離す一つの方法です。しかし、私たちが資本主義に対して集団的に行動するとき、これまでとは異なる生き方が、新たな可能性として立ち現れます。私たちが闘い、資本主義から決別し、さらに、私たちがどのように感じるべきか、誰を愛し、誰を憎むべきか、そして愛や憎しみをどのような仕方で抱くべきかを指示してくるイデオロギーからも決別するとき、今とは違う「異なる世界」が可能となるのです。

政治的な行動は、葛藤なしには成り立ちません。階級間の葛藤、そして世界をどのように組織すべきかをめぐる理念間の葛藤が常に存在します。ここで精神分析は、

変化にとって決定的な要素としての葛藤に注目します。精神分析によれば、葛藤はあらゆる社会的関係において常に存在します—それは社会全体のレベルでも、組織や集団のレベルでも、家族という最小単位のなかにも（その家族がどのような形であれ）見られるのです。そして何より重要なのは、葛藤は個人の内部にも常に存在しているということです。

資本主義のもとで私たちは「個人」として生きることを教え込まれます。しかしこの個人という観念には二つの含意があります。第一に、私たちは他者から切り離された存在—共同的に働くのではなく、「個別化された」存在として生きるよう求められるということ、第二に、私たちは完全で自足的な存在—「分裂していない」個体として振る舞うよう求められるということです。けれども、このどちらも真実ではありません。私たちは常に他者と結びつきながら、同時に常に分裂した存在なのです。

私たちは皆、葛藤に満ちています。同じことを望み、同時に望まない—矛盾する欲望を抱き、さまざまな方向に引き裂かれながら生きています。愛する人を憎むこともあり、必要だと言われるものと、自分が本当に必要だと思うもののあいだで引き裂かれることもあります。精神分析の言葉で言えば、私たちは常に両義的な存在、すなわち矛盾を抱えた存在なのです。

この矛盾と両義性こそが、変化を駆動する力となります。それは「異なるものがありうる」という感受性を開き、世界の中で実際に変化をもたらす行動へと私たちを導くのです。このエネルギーが政治的領域で表現され、反資本主義的な方向に向かうとき、両義性とそれに伴う創造的な葛藤への関与は、あらゆるラディカルな政治運動が本質的に分裂を内包していることを理解させてくれます。その内なる分裂は弱さではなく、むしろ力の源となりうるのです。

だからこそ、社会的葛藤が露わになり、世界を変える可能性—あるいは資本主義を打倒する可能性—が生まれる変革の時代は、きわめて活力に満ちた時期となるのです。変革の時代には、階級関係に関わる葛藤だけでなく、ジェンダー、セクシュアリティ、そしてマイノリティが何を語り、どのように行動できるかをめぐる葛藤もまた、可視化されるのです。

抑圧と自由

抑圧的な体制は、ラディカルな政治と同様に精神分析をも憎みます。これは、ヨーロッパにおけるファシズム体制のもとで明らかになりました。精神分析家たちは命の危険にさらされ、ナチスから逃れざるを得ませんでした。同様のことは、ソ連圏のスターリン主義体制でも起こりました。これらの体制は、階級闘争、女性やマイノリティの闘い、そして内面の葛藤の役割を重視する精神分析そのものを脅威と見なしたのです。

スターリン体制下のロシア、ソ連を模倣した他の国々では、精神分析は禁止されました。この事実は、私たちに「ラディカルな政治はどのような形をとるべきか」という政治的な問いを突きつけます。ラディカルな政治は、つねに民主的な権利を堅持するものでなければならないということです。精神分析の根本的な方法——苦悩の治療方法——は「自由連想」です。思い浮かぶ考えをできる限り自由に語ることを通じて、自らがどのようにして個人として形成されてきたか、何に囚われ、何を避けようとしているのかを理解するための方法なのです。私たちは、頭に浮かぶことを自由に語るなかで、欲望や不安、抑圧の構造を少しずつ明らかにしていきます。精神分析における自由連想は、それぞれの人における疎外のかたちを見出す方法でもあります。そしてもちろん、精神分析の内部でこの自由が成り立つためには、社会全体における言論の自由が前提となります。精神分析の中で自由連想が、性愛や愛のあり方に関する抑圧された観念を明るみに出すように、政治の領域における自由連想もまた、新しいアイデンティティの形——例えば、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランス、クィアなど——を創造的に開花させるために不可欠な空間なのです。

このような新しいアイデンティティの形成は、抑圧された集団との新しい連帯を生み、異なる文化共同体のあいだにより開かれた関係を築くことを可能にします。したがって、言論の自由を禁じる社会は、精神分析の場で何が語られるかを常に警戒します。なぜなら、その語りが外の世界へと溢れ出し、社会を揺るがす可能性をもっているからです。

ファシズム

ファシズムは、極めて危険な現象であり、新たなファシズム運動が台頭している今こそ、いっそう危険な存在です。ファシズムは、支配階級と資本主義国家——すなわち、大規模な私有財産、私企業、支配階級の権力を保護することに専念する国家——が制御できなくなった葛藤の中で成長します。そして、労働者階級や抑圧された人々の運動が敗北し、力を失ったときに、ファシズムは台頭します。その役割は、秩序を回復し、内部の葛藤を抑え込み、資本の利益を再び増大させることにあります。

権力を握る以前から、ファシズムは自由連想の敵であり、また葛藤を開くような真に解放的な政治運動の敵でもあります。ファシズムが葛藤に対処するやり方はきわめて独特で、しかも危険です。それは、内面的な葛藤を他者への攻撃——異なる者への敵意——に置き換えるのです。

ファシズムは、二つの形の抑圧を結びつけています。第一に、資本主義国家による直接的な抑圧——暗殺、誘拐、逮捕、投獄など。第二に、自由連想という発想そのものへのイデオロギー的攻撃による抑圧です。この後者の抑圧——イデオロギーが個々人の心の内部にまで浸透していく過程——こそ、精神分析が長く注目してきた問題でした。ラディカル精神分析は、この構造を明確に言語化して批判してきたのです。

ファシズムは、私たち一人ひとりが、自らの疎外された生に対して抱いている不安や、物事が別のあり方を取り得るかもしれないという可能性について考え始めたときに生じる恐れを動員し、それをいっそう強化します。その恐れは、精神分析でいうところの「防衛」へと組み込まれていきます。ここでは、脅威にさらされた局面において、資本主義国家がファシズムを解き放つことによって自己防衛を図るあり方と、そうした過程が個人の内部において反復され、人々が自ら思考することを止め、やがて自分とは異なると認識したものを憎むようになっていくという、内的防衛の働きとを考えることができるでしょう。

このようにして、本来であれば根本的な変革——すなわち、資本主義の終焉や、人間であることの多様なあり方が花開くこと——へとつながり得たはずの社会内部の対立は、ファシズムによって置き換えられてしまいます。そこ

では、人びとをあたかも同一の存在であるかのように一つにまとめ上げ、異なる者たちに対して対立させるような、管理された形の対立が作り出されるのです。ナチス体制下において、「精神疾患」を有すると診断された人びと、障害のある人びと、同性愛者、さらにはユダヤ人やロマの人びと、その他のマイノリティが大量に殺害されたことは、社会に内在する現実の対立を一掃しようとする、巨大でおぞましい「浄化」でした。そこでは、異なる存在として印づけられた人びとに対するイデオロギー的な攻撃が行われると同時に、対立を消し去ることによって社会が、あたかも健全で自然な一つの有機体として機能し得るのだ、というイデオロギー的幻想が作り上げられていたのです。

ファシズムについて精神分析的な論考がこれほど多く書かれてきたのは、それが、「健康」を単純に強制することが、いかに病的で、破壊的なものになり得るのかを、きわめて端的に示す事例だからです。ラディカル精神分析は、差異を重んじ、その差異について語ることで、そしてそれを生きることによって価値を見出します。まさにその理由ゆえに、精神分析はファシズムの標的となったのです。

歴史と幻想

ファシズムやその他の反動的な政治勢力—すなわち、反資本主義運動や解放運動を阻止するために組織された勢力—は、社会における正常や自然とは何かについての幻想によって駆動されています。すなわちそれは、同時に歴史を消し去る幻想でもあるのです。幻想とは、ある種の組織化された錯覚であり、しばしば安心感をもたらしますが、ときに不穏で危険な、妄想的なものにもなりえます。この幻想は、資本主義社会における支配的イデオロギーの必然的な一部として理解できます。それは社会によって異なる形をとりながらも、最終的には同じ主張に収束します—すなわち、「この社会秩序こそが人間の本来のあり方であり、永遠に続くべきものである」という主張です。

精神分析は、このイデオロギー的幻想がどのように個人の内面で働くのかを探ります。人は、こうした歴史を消し去ろうとする試みを通して、自らの自我の脆さを補強しようとします。「私たちは昔からこのようであつたわけでは

ない」「この世界は変わりうる」という考えは、幻想に支配された人々にとって耐えがたいものです。そうした人々は、多様な「防衛」の形を用いて、他の可能性を思考したり語ったりすること自体を禁じるのです。

しかし事実として、資本主義がこの地球上で支配的な政治経済システムとなったのは、ほんの数百年ほどのことにすぎません。一部の国々では、その期間はさらに短いのです。ヨーロッパにおける資本主義の発展は、他の地域を「未発達」ととどめることで成り立ってきました。自然資源は略奪され、人々は奴隷化されました。植民地主義とは、白人による人種的支配体制であり、被支配者を劣った存在として扱い、発言し行動する権利を奪うものでした。

こうした構造は、資本主義の成立初期から一貫して存在していました。各資本主義文化はそれぞれに独自のやり方で「伝統を発明」してきました。すなわち、比較的最近の生活様式を、あたかも太古の昔から存在していたかのように見せかけてきたのです。

しかし、国民文化なるものが今の形で常に存在していたというのは誤りです。国民文化は、現在の秩序を維持するために歴史を創作し、物語として機能させるものなのです。精神分析の洞察のひとつは、私たち一人ひとりが自分について語る物語もまた、まったく同じ方法で働いているという点にあります。私たちは、「自分とは何者か」「家族や文化への帰属はどこにあるのか」といった物語を繰り返し聞かされ、それを自然で当然のこととして信じ込まされていくのです。

私たちが「誰を、どのように愛すべきか」「性の喜びをどのように組織すべきか」といった物語も、これと同じ構造を持っています。それらは、過去の葛藤のない国民的・ファシズム的物語と同様に、虚構に過ぎません。そして、こうした幻想こそが、私たちが「いかにして今の私たちになったのか」という実際の歴史を抹消してしまうのです。

精神分析は、私たちが時間をさかのぼって本当の物語や実際に起こったことを確かめることは決してできない、と警告します。しかし同時に、私たちの生を支配している物語を問い直すことは可能だと教えます。そして、新しい物語を創造することも可能です—ただし、それに

は新しい生の条件が必要です。異なる物語のあいだの葛藤と緊張こそが、私たちが自らを作り変える可能性を開きます。ラディカル精神分析は、私たちが個人的な次元で自己を作り変えながら、同時に他者とともに集団的に自己を再構築する道を考える助けとなるのです。

【第3章】精神分析は今どこにあるのか

精神分析にもまた、その歴史があります。一部の精神分析家は、精神分析は19世紀末にジークムント・フロイトによって「発見された」と考えています。しかしその立場は、きわめて非精神分析的な仕方、フロイト以前の世界の歴史を消し去ってしまう幻想に囚われています。精神分析が「発見された」と主張することは、あたかもそれがもともとそこに存在しており、たまたまウィーンの一人の男が運よくそれを掘り当てたかのように見せることになります。

問題は、精神分析がもともとあったと想定することによって、過去を非歴史的に語ることになる点にあります。それはまた、精神分析的な概念を前資本主義社会にまで当てはめようとする誤った試みにもつながります。さらに、「私たちは決して精神分析から自由にはなれない」という考えや、「あらゆる文化は精神分析によって分析可能である」という植民地主義的な前提にも導かれてしまうのです。これに対して、ラディカルな精神分析家たちはより慎重であり、精神分析はフロイトとその弟子たちによって「発明された」と述べます。

精神分析が発明されたのは、それがまさに時代に適合していたからです。フロイト自身は、精神分析を科学的であると主張するのを好み、歴史上の人物にも適用しようしました。精神分析が資本主義社会における現在だけでなく、過去をも説明できる理論的枠組みであるかのように振る舞ったのです。しかし実際のところ、資本主義社会を理解し、それに挑戦するために特別に構築されたマルクス主義と同様に、精神分析もまた、それが生み出された社会を理解するために特化した理論なのです。精神分析が成立した時代、それは発展途上の資本主義社会でした。そこでは、疎外が進行し、人々は互いからますます分断されていました。そのような状況では、個人として経験される苦悩を、個人として扱うことが理に

かなっていました。すなわち、苦悩も治療もともに「私事化」されたのです。精神分析は、資本主義社会の内部にありながら、その社会に抗して生を語る営みだったのです。

人々が自らの身体から疎外されていたこと—これこそが、フロイトのもとに訪れた患者たちの奇妙な「ヒステリー症状」の背景にありました。彼女たちの身体の一部は、自らの意志とは無関係に動き出し、叫び、痙攣し、麻痺しました。彼女たちにとって、自らの身体そのものが脅威だったのです。その創造的な力もまた、体系的に歪められていました。また、集団的活動は病理的なもの—群衆心理として危険視されました。そしてその考えを積極的に支持したのが、急進的な社会変化を恐れた自由主義的知識人としてのフロイト自身だったのです。

もちろん、精神分析の発展を資本主義だけに還元することはできません。女性を感情的で非合理的な存在と見なす社会構造の中で、「科学」であろうとした精神分析は、しばしば支配的な男性性と結びつき、家父長制の秩序に加担しました。家父長制とは、女性に対する男性の組織的支配であり、家族こそがその権力の中継点として機能していたのです。ヨーロッパにおける資本主義の発展は、世界の他地域の搾取と密接に結びついていました。「文明」と「野蛮」というイメージ—そして「野蛮」が脅威であるという幻想—は、フロイト自身の子どもの「発達」理論にまで影響を与えています。

ユダヤ人であったフロイトは、反ユダヤ主義によって主流社会の周縁に置かれ、確かに社会批判的でした。しかし同時に、精神科医という専門職の地位に不安を抱く医師でもありました。そのため最終的には、フロイトはより自由な生を志向する人々—すなわち、抑圧から少しでも解放されようとする人々—よりも、既存の社会の側に立ったのです。

こうした歴史の帰結として、私たちは今日、ある二重の問題に直面しています。それは、精神分析が資本主義社会のいくつかの側面を解き明かすための鍵であると同時に、その社会を支える錠前の一部にもなっているということです。したがって、ここで本当に必要なのは、精神分析そのものを政治的に理解することなのです。

学問としての精神分析

精神分析の抱える問題の一つは、それが学術界の中にあまりにも深く埋め込まれてしまったという点です。ドイツにおいてナチスにより精神分析が破壊された結果、多くの精神分析家たちは亡命し、他国で新しい生活の場を見つけました。そのとき彼らは、移民としての立場に不安を抱き、「新しい国に適応しなければならない」という強い意識に駆られました。その過程で、多くの精神分析家たちは、もともと批判と反抗のための道具であった精神分析を、適応のための道具へと変えてしまいました。すなわち、精神分析は人々を社会に順応させ、資本主義文化の中で良い市民として振る舞えるようにすることに焦点を合わせるようになったのです。

それでも一部の精神分析家たちは批判的立場を保ち、特に英語圏では、精神分析の新しい潮流が大学の学問領域の中に根づきました。しかしながら、「批判的」と称される学術的研究は、実際の政治的行動と結びついた真の批判とは大きく異なることがよくあります。資本主義、人種差別、性差別を本当に批判的に分析するということは、人々が世界を変えるためのラディカルな解釈を提示することでなければなりません。さらに言えば、社会に対する批判的分析を読むという行為そのものが、読者を政治的变化の過程に巻き込むものであるべきです。そして、その分析が真に有効かどうかは、人々によるストライキや占拠、あるいは新しい生の形の構築といった集団的変革の実践を通して確かめられるのです。

学者たちは読むこと、書くこと、学術誌に発表することを訓練されています。そして、自らの研究を一般読者に向けて「わかりやすく伝える」本を書くことは、しばしば自分の所属する学部で軽視されます。研究プロジェクトの多くは、資金提供者によって制約され、研究の「影響力」を将来の「社会政策」の範囲に限定するよう求められます。その結果、文学、哲学、心理学、さらには社会理論や政治学の学科において人気を得た精神分析は、それぞれの分野の枠組みに適応してしまったのです。こうして精神分析は、抽象的で、時にエリート主義的なものとなり、現実の社会で生き、働き、変革を望む人々には理解しがたいものになってしまいました。

もともと、いくつかの興味深い成果もあります。例えば、

ファシズムに対して批判的な精神分析的研究には注目すべきものがあり、また、ヨーロッパ大陸から亡命して大学に居場所を得た知識人たちは、ファシズムの本質について重要な洞察を提供しました。さらに近年では、セクシュアリティ理論の新たな展開—特に、クィア理論—が、こうした学問領域の中で生まれています。そして、その理論を現実社会の変化と結びつけようとした研究者たちが、伝統的な学問の慣習を打ち破り、学問的境界を越えたことは、高く評価されるべきです。

臨床としての精神分析

このような過程の中—とりわけ英語圏において顕著ですが—大学などの学部・研究部門で発展してきたラディカル精神分析は、臨床の現場における精神分析から、しばしば切り離されてきました。

臨床の領域、すなわち苦悩の治療として精神分析が用いられる場面では、精神分析はしばしば精神医学と混同されます。精神医学は医療の一分野であり、精神科医が患者と話をする場合であっても、心の奥底では症状を何らかの疾患の表れとして理解するという医療的前提を持っています。フロイトももともと精神科医として訓練を受けましたが、彼が精神分析を発展させるためには、精神医学からの決別が必要でした。精神分析は医療行為ではなく、語ることによる治療なのです。

言葉にすること自体が、必ずしも非難されずに聞いてもらえることを保証するわけではありません。しかし、まさにそれこそが、精神分析家が行うべきことなのです。精神分析家は、語られるものに耳を傾け、矛盾や反復を指摘し、葛藤を開き、それと共に働きながら理解を深める空間をつくります。そして何よりも重要なのは、語る本人が自らの言葉を通して、自分自身で理解していく余地を確保することです。語りは常に他者に向けられています。分析家という他者は、話す人に挑戦を与え、繰り返しを指摘し、「何も問題はない」「矛盾も葛藤もない」と装って語りを終わらせようとすることを許しません。

一方で、患者を導き、特定の方向へ誘導しようとする専門家もいます。その多くは心理学の訓練を受けた人たちです。心理学は問題となる思考を特定し、それを修正することを目的とします。したがって、そこには「何が正常

で何が異常か」という暗黙の前提がつねに存在しています。ここで再び、「人がどうあるべきか」「どのように幸福であるべきか」「社会の中でどう機能すべきか」を規定してしまうという問題に立ち戻ることになります。ラディカル精神分析は、したがって本質的に「反心理学」なのです。

臨床の間では、精神分析が治療的な洞察をもたらすこともあります。しかし分析家たちは、治療を安易に「治すこと」そのものにしてしまわないよう、きわめて慎重です。心理療法は、クライアントに「理解された」と感じさせることを重視しますが、ラディカル精神分析においては、「理解」よりも「誤解」こそが重要です。なぜなら、理解という行為はしばしば、患者を治療者と同じ枠組みの中に取り込む働きをしてしまうからです。親が子どもに「あなたの気持ちはわかる」と言うとき、それはしばしば支配の言葉でもあります。むしろ、「わからなさ」を受け入れることこそが関係を開くのです。

精神分析家は、誤解を耐え忍び、それとともに働きます。それは分析家自身の誤解であり、また語る側(分析主体)の誤解でもあります。語ることを通じて人は自らの無意識に出会うのです。したがって、精神分析家は、各人がそれぞれ固有の仕方疎外に向き合い、自らの症状を生き延びるために機能させていることを理解していなければなりません。語るための空間を与えることは、「他者の内的世界を理解したふりをする」とは全く異なります。

フロイトは「精神分析の役割は、ヒステリーの苦悩を普通の不幸に変えることだ」と述べたと伝えられています。搾取と抑圧を基盤として体系的に組織された社会において、精神分析がそれ以上のことを装うことなど、どうしてできるでしょうか。資本主義のもとでは、不幸こそがビジネスであり、「幸福」を約束する商品が売買される—これがこの体制のルールなのです。したがって、私たちがフロイト以上のことを精神分析に期待できるとすれば、それは精神分析を社会変革と結びつけ、この悲惨な政治経済システムを根本から終わらせることによってのみ、可能になるのです。

私たちの周りにある精神分析

私たちは皆、いわゆる精神分析家と患者のイメージを

よく知っています。ソファの後ろに座る分析家、そして子ども時代の話や延々と語りながら、結局は自分の問題を親のせいにして終わる患者—そんな光景です。やがてその患者は精神分析を理想化し、自ら分析家を志したり、あるいは「エディプス・コンプレックス」などどこかで聞きかじった概念を使って、友人や仲間に素人めいた解釈を披露したりするようになります。エディプス・コンプレックスとは、父との競争意識や母への願望を説明する概念として知られています。しかし残念なことに、一部の熱心な精神分析支持者たちは、このモデルを社会全体の解釈にまで拡張してしまいます。少なくとも臨床の間においては、精神分析の目的は人をエディプス・コンプレックスに適合させることではなく、そこから自由になることにあります。

ここで問題となるのは、精神分析の概念が大衆文化的に取り込まれる現象です。これが、精神分析を「ラディカルな」ものとして説明することを非常に難しくしています。単純化しすぎれば、無意識や幻想の役割についての日常的な常識をなぞるだけになり、結局は何も説明したことになりません。すべてがそのままの位置にとどまり、何も変わらないのです。反対に、複雑にしすぎると、変人じみた専門家や政治を奇妙な理論に変える学者と見なされてしまいます。

さらに注意すべきは、反資本主義運動の中で精神分析の概念を用いることのリスクです。精神分析と左派とのあいだには、古くから密接な関係があります。急進左派の中で最もラディカルな人々の多くが精神分析に惹かれてきたのは、そこに歴史における個人の役割を補完する要素があり、また人々がいかに非合理で自己破壊的な観念に執着するかを説明する力をもっていたからです。

精神分析はまた、フェミニズムの領域でも取り入れられてきました。フェミニストたちはそれを用いて、父権制が性をどのように「正常」で「自然」なものとして組織しているかを暴き出そうとしました。この方向性は、まさにラディカル精神分析へと通じています。フェミニストたちの手に委ねられた精神分析は、「正常」であると想定されてきたものに抗する、真にクィアで革命的なセクシュアリティへの道を切り開きます。そもそも、「正常」な人など誰一

人として存在しないのです。

さらに、反植民地主義理論や反人種主義理論のなかでも、精神分析は重要な役割を果たしてきました。それは、抑圧者による人種差別だけでなく、被抑圧者の内面に内在化された人種差別をも理解するための手がかりを与えてきました。精神分析は、私たちがいかにして自らの抑圧を内面化し、それに加担してしまうかを鋭く示すのです。

ただし、左派やフェミニズム、反植民地主義の運動の中には、いわゆるポップ精神分析的な考えが入り込むこともあります。例えば、「抑圧された無意識の衝動を解放すべきだ」といった単純な発想や、「変革の一部として健全性を表現すべきだ」というような主張です。

しかし、私たちは変革の中で「抑圧されたものを解放する」のではありません。私たちは「新しいものを創造する」のです。私たちの課題は、変革的な運動を構築し、資本主義を超えたより良い世界を創り出す基盤を築くことにあります。したがって、精神分析が資本主義のイデオロギー装置の一部として飼いならされてしまう危険に注意する必要があります。精神分析の歪曲の多くは無邪気に見えるかもしれませんが、私たちは慎重でなければなりません。特定の師や専門家の言葉を鵜呑みにするべきではないのです。

精神分析が私たちに教えてくれるのは、師や体系的な説明原理に対する懐疑の重要性です。私たちはすでに、スターリン体制下でのマルクス主義の墮落—すなわち、それがまるで宗教のような信仰体系へと変質した出来事—から、その危険性を学んでいるはずです。ラディカル精神分析の発展は、状況ごとに異なる文脈の中で変化し続けるものであり、常に集団的な過程でなければなりません。

【第4章】精神分析にはどのような意味があるのか

これが決定的な問いです。—精神分析を、変革的な運動と対立するのではなく、それと共に働くかたちで、実践的にどのように用いることができるのか。フロイトとその後継者たちが切り開いた数々の進歩的な思想や実践的可能性にもかかわらず、精神分析には多くの落とし穴があります。多くのラディカルな思想がそうであったように、

精神分析もまた体制に取り込まれ、中和され、時に私たち自身に向けて反転させられてしまったのです。解放の方向を指し示しながらも、それが抑圧の手段へと変えられてしまう—そこにこそ、精神分析の二重性が潜んでいます。したがって、ここでは精神分析の概念を実践の場においてどのように用いることができるのかを考えます。具体的には、個人の領域、集団の領域、社会全体の領域、—この三つの次元で精神分析の考え方がどのように働くのかを見ていきます。そして同時に、これらの領域において精神分析が私たちに何を提供しうるのか、また、どのような危険や誤用に注意すべきかについても検討していきます。

闘争と変革の科学

精神分析は、その実践と結びついた、特別な意味での「科学」です。それは化学や物理学のような「自然科学」ではなく人間科学であり、社会的世界を理解するための説明の枠組みを提供するものです。しかし、精神分析があたかも自然科学のように中立的かつ「客観的」であると装い、実践から切り離された単なる観念体系として流通するとき、それはイデオロギー化します。すなわち、支配や権力を自然なもの、不変のものとして提示し、世界を変えられないものとして描く虚偽の思想になってしまうのです。

このようなとき、精神分析はあたかも世界のすべてを説明できるかのような奇妙な世界観に変質する危険があります。社会的・自然的現象のすべての謎を解く「万能コード」のように振る舞うのです。一部の精神分析家はこの思考法に惹かれ、他の知の形態—とりわけフェミニズムやマルクス主義—に対して抵抗的、さらには敵対的になります。彼らはフェミニストやマルクス主義者に誤りを正す講義を行い、解放的な思想の代わりに精神分析の概念を当てはめようとするのです。

しかし、ラディカル精神分析の最良の部分は、むしろマルクス主義やフェミニズムに近いものです。マルクス主義は、単に世界を記述するための理論ではありません。ましてや、「政策立案者」に資本主義を円滑に運営させるための指針を与えたり、マルクス主義を宗教的信仰のように用いる体制—かつてのロシアや、現在の中国の

ような資本主義国家—を支えたりするための道具でもありません。

マルクス主義は、搾取と抑圧を説明するのと同じ瞬間に世界を変革することを目的とした理論です。それは、実業家や政治家といった権力を持つ側の立場からではなく、搾取される側の立場からこそ理解されるものであり、私たちの理解を変え、同時に世界を変える行動へと駆り立てるのです。そして社会的条件を変える過程において、私たちは何が本当に有効であるのかを試すことができます。同様に、フェミニズム、最もラディカルなセクシュアル・ポリティクス、そして反人種主義闘争もまた、変化の過程として機能します。変化の過程の中で、私たちは自らを抑え込んできた力を発見します。これらはいずれも、闘争と変革の科学なのです。

したがって、ラディカル精神分析もまた闘争と変革の科学です。それは、私たちが個人的なレベルでどのようにして現在の自分になったのかを理解しようとする闘いの一部であり、その理解の過程のなかで自己変革を助ける実践なのです。このことは、理論が上から与えられるだけでは機能しないことを意味します。人々が「何を考えるべきか」を教えられるのではなく、自ら考え、行動するときのみ理論は生きるのです。ちょうどマルクス主義やフェミニズム、反人種主義の思想が、被搾取者や被抑圧者が自らの力で世界を意識化し、行動することによって初めて意味を持つように、精神分析もまた、人が自ら考え、行動するための手段なのです。

この「自ら精神分析を用いる人」は、しばしば「患者」と呼ばれます。まるで精神分析が医療行為であるかのよう。または「クライアント」と呼ばれ、まるでサービスを購入するかのように扱われます。しかし、精神分析の専門用語では、この人を「分析主体」と呼びます。「分析主体」とは、自ら分析する者という意味です。精神分析は唯一の道ではありませんが、確かに有効な一つのアプローチです。では、それはどのように働くのでしょうか。

個人的なものは政治的なものである

資本主義社会のもとで私たちは、他者と切り離された存在として自らを経験します。それは、私たちが他者と競争するよう育てられてきたからです。そのため、私たち

は苦悩を個人的なレベルで経験することになります。政治的活動家たちは、自分たちに向けられる暴力や不正義に対する苦悩を個人の問題として感じつつ、同時に搾取と抑圧の構造を認識しています。この二重の認識が、苦悩をいっそう深めてしまうのです。これは昔からそうであり、活動家たちは仲間とともに闘いながらも、自らを支え、助けを求め、ケアする方法を見出してきました。彼らは、集団的な実践こそが世界を変える唯一の道であると理解しています。しかし、それは容易ではなく、ときに痛みを伴い、ときに耐えがたいほど重いのです。

いま、私たちは同じ状況を仲間たちの中にも見出します。政治的闘争に初めて参加した人々の多くが、世界にあふれる暴力と搾取の規模に圧倒され、絶望し、恐怖を覚えるのです。気候危機、資本の利潤追求による地球破壊、女性への暴力、構造的な人種差別—これらを知ること、多くの人が「資本主義の終わりよりも世界の終わりの方が想像しやすい」と感じます。また、性差別によって自らの身体がどのように傷つけられてきたのかを理解しようとする人々、あるいは男性、女性、クィア、トランスであることの意味を問い直そうとする人々が、家族や友人、さらには左派の一部からも攻撃を受けるといふ現実があります。本来なら連帯すべき人々からも、理解されずに傷つけられるのです。

私たちは、人種差別がもたらす深い傷や、障害をもつ人々への扱い—彼らが生産的な労働者として不適格と見なされ、社会的に排除される現実—からも、痛みを学ばなければなりません。そして同時に、苦悩にどう応答するかということについても学ぶ必要があります。

この社会では、苦悩は他の多くのものと同じく「私事化」されています。私たちは苦しみを内に閉じ込め、外に出せません。そのため、気分を良くしてくれるサービスを購入する、クライアントとして助けを求めることが自然なことのように感じられるのです。また、自らの苦悩を医学的問題とみなし、医師のもとを訪れて「患者」になることもあります。

精神分析以外にも、学ぶべきアプローチは多く存在します。例えば、「精神的苦悩」は私的に閉じ込められていると見なし、医療的診断や薬物治療を拒否して、集団的な解決を模索する運動があります。「マッド・ブライド」運

動や、自傷行為、幻聴、被害妄想、反抗の欲求について語る場をつくる運動もそうです。

精神医学的ラベルは、支援を受けるための手段として人々に安心を与えることがあります。しかし、それらのラベルは本人自身が再定義し、自らの手で使うべきものであって、医師や家族から一方的に与えられる終身刑のような診断であってはならないのです。「反精神医学」運動の中には、「病気」とラベリングされたときこそ、そのラベルを闘争の武器に変えるべきだと主張する立場もあります。すなわち、怒りを集団的闘争のエネルギーへと転化するのです。

精神分析も、こうしたアプローチから学び、それらと連帯する必要があります。しかし、精神分析が「臨床」と呼ぶ場において何をしているのか—そこには違いがあります。精神分析の「臨床」とは、白衣を着た医師によって運営されるものではありません。それは単に、他者と語るための秘密の空間—精神分析家、精神分析的セラピスト、心理力動的カウンセラー、あるいは集団分析の場—において、私たちが通常は押しやって「無意識」にしている自分自身の一部に出会うための場所なのです。精神分析とは、まさに「語ることによる治療」です。この表現は、最初期の分析主体の一人が用いたものです。

分析主体はソファに横たわるのか。おそらくそうでしょう。しかし本質的なのは、評価されることなく自由に語るための安全で守られた空間が与えられることです。精神分析家は、意味を押しつけたり、解釈を強要したりしてはなりません。重要なのは、分析主体自身が自らを分析できる余白を与えることなのです。分析家は、語りの中に繰り返される言葉や関係のパターンに注意を払います。重要な他者との関係性—それは分析家自身との関係にも及びます—が再演されるのを観察するのです。

それが繰り返され、意識化されるとき、分析主体は前に進むかどうかを自ら決断できるようになります。この決断は容易ではありません。よくある冗談にこういうものがあります—「電球を交換するのに必要なのはセラピスト一人だけだが、その電球が本気で変わる気にならなければならない」。

しかし、精神分析を真剣に受けとめるなら、この冗談は成り立ちません。私たちはあまりにも深く「自分とはこう

いう存在である」と教え込まれており、変化を拒むよう訓練されているからです。電球＝分析主体は、実際には変わりたくないのです。同じ言葉、同じ行動を繰り返す方が楽だからです。ゆえに、変化を促し、変化を可能にする分析家との関係の中で行われる分析は、困難で、ときに苛立たしく、感情的に揺さぶられるものなのです。

さらに注意すべきは、一部の精神分析家が医学的訓練を受けており、無意識のうちに診断や解釈を医療行為のように扱ってしまうことです。例えば、トランスの人々を「性別違和」という医学用語で一括し、治療の対象とするような場合があります。さらに悪いことに、一部の分析家は「男女の生物学的差異は自然なものだ」という反動的な観念を持ち込むことさえあります。あるいは、「異文化理解」と称して、結果的に人種主義的な前提に基づく判断をしてしまうこともあります。中には、単に保守的な価値観を持つがゆえに、「人々が変わるべきであり、世界は変わらなくてよい」と信じている分析家もいます。

こうした問題は、精神分析が公的医療制度外の私的実践として行われることが多いという構造によって、いっそう深刻になります。分析主体が高額な料金を支払わねばならず、分析家の側も「支払いこそが治療の条件である」と信じるようになるのです。また、公的医療制度内で行われる精神分析も、医療制度のもとで「評価」「診断」「治療」という枠組みに組み込まれ、本来語ることによる解放であるはずの分析が、むしろ苦悩を閉じ込める罠へと変わってしまうのです。

私たちは、「個人的なものは政治的なものである」というフェミニズムのスローガンを真剣に受け止め、「個人的なもの、そして私事化された苦悩を、政治的なものとして扱う必要があります。ラディカル精神分析は、政治を単に個人の水準へと還元するのではなく、個人の苦悩がなぜ個人的なものとして形をとるのかを、政治的文脈の中で理解することを目指します。ラディカルな分析家たちは、苦悩の現実に取り組む他の運動と連帯しながら活動し、「語ることによる治療」がどのような社会的文脈・制度の中で有効でありうるのかを、政治的理解に基づいて実践しているのです。

集団と組織

世界を変えようとするなら、私たちは集団的に組織化し、政治的グループに参加し、共に動く必要があります。個人の内部に閉じこもった「変化」だけでは十分ではなく、実際にはそれは不可能です。なぜなら、この世界は競争を奨励し、異なる者や適応しない者を病理化するように構造化されているからです。

しかし当然のことながら、集団や組織、政治的政党そのものにも多くの問題があります。それは避けがたいことです。どんな組織も、外の世界から人種差別や性差別、そして無自覚な反動的観念を引きずり込みます。それらは現状に抗しようとしながらも、同時に現状を再生産してしまうのです。時には、個人が抱える問題を集団内で再演することが原因となり、また時には、集団という構造そのものの働き方に起因することもあります。

本来なら解放的であるはずの空間が、息苦しい場になってしまうことがあります。集団が、私たちを鼓舞するどころか疲弊させる制度的空間となってしまうのです。会議は形式的で退屈な手続きに費やされ、同じ議論が繰り返されるばかりで何も変わらず、発言権を持つのはいつも同じ人々—そうすると、無力感と絶望が広がります。さらに悪い場合には、集団内の権力構造が男性による女性への搾取やハラスメントを可能にしてしまうこともあります。実際、左派政党の中にもそのような事例がありました。その結果、政治的組織に参加すること自体への強い嫌悪や不信が生まれます。集団の中で傷ついた人々は内向し、退却し、離脱します—そして、何も学ばれないままです。

最もラディカルな精神分析の一部は、このような集団的力動を理解するために、「集団分析」や集団精神療法的アプローチとして展開されてきました。その目的は、個人の精神分析と同様、人々を適応させることでも、組織を効率的に機能させることでもありません。むしろ、組織が人々に何をしているのかを明らかにし、専門家の権威ではなく、メンバー自身が集団的に決めた基準に基づいて、よりよく働けるようにすることにあります。

精神分析家は、集団の中で「防衛」がどのように機能しているかに注目します。特定のテーマ—例えば、組織内の人種差別—を語ろうとすると不快感が生まれ、メンバーはそれを避けたり、あるいはその問題を持ち出す人を

偏執的あるいは厄介者とラベルづけたりします。このようにして、語ることそのものが防衛として働くのです。

また、性とセクシュアリティも組織内でしばしば対立の焦点となります。それがあまりにも個人的で親密な領域であるために、人々は強く防衛し、権力をもつ者によってその領域が侵害されると、いっそう深く傷つくのです。精神分析家はここで、「分裂」という心理的メカニズムが働いていることを観察します。私たちはしばしば、理性的に考えるよりも、「受け入れられる善い人」と「避けたい悪い人」とを無意識に分けてしまうのです。さらに、集団全体が防衛的幻想を発達させることもあります。自らを無敵な存在、歴史的に重要な運動と見なし、その結果、内部批判や周縁的立場の人々を破壊者として排除してしまうのです。こうしたとき、「分裂」はいっそう危険になります。したがって、組織における無意識の力を過小評価してはなりません。同時に、変化を妨げている現実的な障害にもしっかりと目を向ける必要があります。

ここでもう一つ、精神分析的な概念を用いる際の警告があります。精神分析家たちは、自らを守るためにあらゆる現象を自分たちの知に変換する術に長けています。したがって、彼らの語る無意識の過程や反復の力動を聞く際には、それを政治的文脈に位置づけることが不可欠です。精神分析は確かに役立ちますが、社会変革の中心にあるべきなのは常に政治なのです。

組織の中で何が起きているのかについて熟考するための時間があります。そして私たちは、その時間を必要としています。同時に、理念を実践へと移すために行動すべき時間もあります。集団は、「傷ついている」という感覚について際限なく語り続けたり、問題を構成員個々の個人的病理に還元したりすることなく、精神分析的な洞察を真摯に受け止めることができます。いずれにしても、集団は自らが何をしているのかについて考え続けなければなりませんし、その際に精神分析は助けとなり得るのです。

社会・文化・イデオロギー

私たちは世界を変えようとしています。そして、それを実現するためには、国際主義的に連帯して取り組むことが不可欠であると理解しています。苦い経験から私たち

はすでに学びました—「一国社会主義」などというものは存在しないのだと。世界の中での私たちの運命は、「国民」や「人種」といったカテゴリーによって分断された他の人々の運命と切り離しがたく結びついています。ましてや、一人の個人の内部に社会主義を築けると考えるのは、非精神分析的な心理療法家たちが煽る幻想に過ぎません。真の連帯は、闘争における連帯です。それは、私たちのローカルな実践を、常にグローバルな出来事と結びつけるものです。この闘いは物質的であると同時に、イデオロギー的でもあります。したがって、私たちは文化—ローカルな文化とグローバルな文化の双方—を理解し、そこに介入する必要があります。精神分析は、その理解と介入の一つの方法なのです。

ファシズム、そしてそれが現在進行形で忍び寄る「潜行するファシズム」は、精神分析が理解の助けとなる重要な政治的現象の一例です。私たちはまず、労働者階級が敗北し、意気消沈したときにファシズムがどのように台頭するのかを、政治的に分析する必要があります。また、ファシズムがどのようにして、巨大資本の力と労働者階級運動の間に挟まれた中間層の不安と憎悪に根を下ろすのかも理解しなければなりません。しかし、ファシズムの毒のような怨恨—「異なる者」への攻撃性—には、理性では説明できない側面があります。性的自由や文化的マイノリティの自己主張はファシストを激怒させ、ファシズムという社会現象は、政治的弾圧と同時に、情動的次元での「抑圧」としても機能します。

ファシズムにとって、人間が多様なあり方で生きる自由は脅威です。その怒りは、やがて陰謀論的妄想や被害的空想へと変化し、「背後で糸を引く黒幕」という幻想を生み出します。彼らは、自らの怒りや憎悪を他者に投影し、まるでそれが他者から向けられているかのように錯覚することで、世界を善と悪に分裂させます。例えば、Qアノン理論はその典型です。それは現代のファシズムと結びつき、ジョージ・ソロスのようなユダヤ人を「黒幕」として描き出します。

この「悪」とされた人々はやがてスケープゴートとなります。反ユダヤ主義的憎悪や恐怖は、投影によって増幅され、長年右派によって流布されてきた陰謀論的イデオロギーを利用しながら、ユダヤ人だけでなく、イスラモフォ

ビアの文脈ではムスリムも攻撃の対象となります。ファシストは、純粹で秩序ある世界を夢見ており、「人種混合」という幻想が彼らの最深層の恐怖を刺激します。ファシズムは心理学者の手に負える問題ではありませんし、精神医学によって治療できるような「精神疾患」でもありません。精神分析は、ファシズムに惹かれる人々の中でどのような自己破壊的なメカニズムが働いているかを明らかにする助けにはなりません。しかし、ファシズムという政治的問題を単なる個人の病理に還元してはならないのです。

ここで注意が必要です。精神分析は右派イデオロギーの内部で何が起きているかをある程度明らかにしますが、右派イデオロギーそのものは、無意識の領域とは独立に機能する政治的現実でもあります。したがって、精神分析を用いる際には、すべてをその専門領域—内的世界の説明—to還元してしまわないようにしなければなりません。精神分析が誕生する以前から反ユダヤ主義は存在していました。この有害なイデオロギー現象は、ナチ時代に精神分析そのものを「ユダヤ人の科学」として攻撃する形で影を落としたのです。

もう一つの問題は、精神分析がしばしば中立的で、客観的な学問を装うことです。世界を変えるのではなく、単に記述するだけの科学であるかのように振る舞うのです。文化の解釈者を自任する精神分析家たちは、しばしば精神分析の実践における根本原理—分析するのは分析家ではなく分析主体である—という点を忘れています。社会の中で個人や集団に起こっている多様な現象は、精神分析的に一義的に「解釈」できるものではなく、私たち自身が自らの動機や衝動を省察する必要があるのです。ところが、精神分析家は自らの理論枠にあまりにも熱中するあまり、社会現象を全て「無意識」や「欲動」の言葉で説明しようとし、結果として保守的な「バランス」論を唱えることがあります。彼らは、世界に対する極端な、非合理的な反応を危険視し、その「中庸」こそが賢明な態度だと説くのです。

「急進性」そのものが問題なのではありません。この悲惨な世界を抜け出すためには、私たちは実際に急進的な措置を取る必要があります。私たち社会変革者は急進的です。資本主義が私たちとこの地球にもたらしたものを憎み、人々を動員して世界を変える集団的实践に献

身しているのです。今とは違う「異なる世界」は可能です。私たちはそれを平和的手段で実現できるならそうすべきですが、必要であれば、歴史上のすべての被抑圧者がそうしてきたように、自らを防衛する権利も行使しなければなりません。私たちは、右派と左派の考えを「バランスよく」並べることはしません。BBC のように中立を装うことはしません。私たちは常に、反資本主義の闘争に身を置き、反人種主義者、フェミニスト、障害者権利運動家たちと連帯して闘うのです。常に、抑圧する者に抗し、抑圧される者の側に立つのです。

そのため、ときに私たちは、単なる「説明」にとどまり、イデオロギーとして機能してしまう精神分析に対しても対峙しなければなりません。フロイトが精神分析を発明して以来の一世紀のあいだ、精神分析は各地で周縁化され、時に抑圧されてきました。しかし現在、状況はより複雑です。精神分析はすでに大衆文化の一部となっているのです。「無意識」「幻想」「分裂」「投影」といった語彙は、いまや多くの人々にとって常識的な言葉になっています。映画やテレビには、ソファに横たわる分析主体や、解釈を与える精神分析家の姿が繰り返し登場します。こうしてフロイト的な概念は中産階級の雑談の一部となりました。しかしそのことは、政治を精神分析に溶かし込んでしまうという危険を孕みます。社会的な対立が、個人の内的葛藤へと還元されてしまうのです。

【第5章】私たちはそこから何をつくり出せるのか

精神分析は、資本主義のもとで私たちが経験する苦悩に対する唯一のラディカルなアプローチではありません。しかし、私たちはそれを真剣に受けとめる必要があります。そして、その活用にあたっては、交差的でなければなりません。すなわち、異なる変革的政治の諸形態を連携させるときと同様に、精神分析を用いる際にも、抑圧と搾取の複数の次元を交差させる視点を持つことが求められるのです。交差性(インターセクショナルリティ)とは、搾取され抑圧されている人々のあいだの異なる立場を連携させる政治的アプローチです。それぞれの立場やアイデンティティの主張を尊重し、それらを照らし合わせることによって、他の立場が見落としているものを明らかにします。

私たちは、抑圧のあらゆる次元に注目しますが、それは特定のアイデンティティ―「自分は誰であるか」という感覚―を優先するためではありません。むしろ、政治的実践のなかで他者との連帯を通じて新しいアイデンティティを構築するためです。伝統的な反資本主義的階級政治は、しばしば人種差別や性差別を内包してきました。しかし、反人種主義運動やフェミニズム運動は、そのような階級政治を批判的に豊かにし、再活性化させます。それは自己批判的であり、エネルギーを生み出す実践なのです。ここで重要なのは、アイデンティティそのものだけでなく、それらの間に生じる関係性―接続、連携、そして「間の空間」―です。女性か男性か、黒人か白人か、労働者階級か中産階級かといった固定的区分の間に、私たちは出会い、交錯し、新しい可能性を生み出す領域を見出します。

精神分析は、個人のアイデンティティの形成過程を説明する理論として、すでにある意味で交差的な性質を持っています。私たちは「自分はこういう人間だ」と思い込みますが、実際には、人生の中で出会い、関係を築いてきた重要な他者たちとの関係の断片から縫い合わされてできています。私たちの個別的な「自我」は、多様でしばしば競合する同一化―感情的に結びついた他者とのつながりやそのイメージ―の産物です。こうした競合する愛着や結びつきは、無意識のレベルにとどまり続け、その間には常に葛藤が存在します。しかし、その葛藤や矛盾こそが、私たちに運動と変化のための空間を与えてくれます。それは変化の素材であり、変化のために不可欠なものです。私たちがこれまでに述べてきたように、この両義性こそが、変化の可能性を駆動する原動力なのです。

ローカルとグローバル

精神分析は、「個人的なもの」と「政治的なもの」との矛盾した結びつきのなかで働きます。ここでいう「政治的」とは、官僚的で疎外された職業政治の世界のことではなく、私たちが実際に世界を変えようとする過程の中で学ぶ、集団的な闘争の領域を意味します。また「個人的」とは、自己改善のために治療に閉じこもることではなく、変化の過程において仲間とともに関わり、感情的・経験的に

関与することを指します。すなわち、精神分析は自分を変えることではなく、自分たちと世界を同時に変えるための実践として考えられるのです。

この立場からすれば、私たちはまずローカルな水準で活動することになります。ときには、きわめて局所的に一場合によっては一人の個人に焦点をあてて一問題を吟味し、言葉にするための空間を提供することが必要です。その空間は、しばしば「臨床」と呼ばれるものの形を取ります。しかし、この臨床とは白衣の医師が支配する場ではなく、安全で、秘密が守られ、安心して語ることができる場であると同時に、より広い政治的变化の過程と明確に結びついた場でなければなりません。

一方で、精神分析は社会的・構造的なレベルでも作用します。ここでは、精神分析に関わる人々が、自らが属する社会運動から学ぶことが欠かせません。また、精神分析の限界を理解することも必要です。そして、最も広いレベルでは、ラディカル精神分析は国際主義的でなければなりません。世界各地のラディカルな運動が精神分析と出会ってきた経験から学び、彼らが精神分析をどのように用い、変化させてきたかを理解する必要があります。

精神分析が果たしうる進歩的役割についての議論は、これまでも繰り返し提起されてきました。1920年代の中央ヨーロッパでは、マルクス主義者である精神分析家たちが、政治的抑圧・家族内抑圧・性的抑圧の連関に注目し、変革のエネルギーを引き出そうとしました。1930年代、ファシズムの台頭期には、革命家たちが精神分析に惹かれました。彼らは、精神分析の理論によって、幻想が人々の変革への欲望を歪め、異なるものへの憎悪へと転化させる力を説明しようとしたのです。

1940年代から50年代にかけては、亡命した精神分析家たちが、世界各地でラディカルな思想を絶やさぬよう努力しました。1950年代から60年代にかけては、反植民地主義の精神分析家たちが、民族解放運動の中で活動し、人種差別の深層構造とその持続力に挑みました。1960年代から70年代にかけては、フェミニストたちが精神分析に目を向け、父権制一男性が女性を支配する権力構造―が、資本主義の幻想的次元でどのように機能しているかを明らかにしました。さらに近年では、

LGBTQI+の人々が精神分析に新たな関心を寄せており、それは「アイデンティティ」や「アイデンティティ・ポリティクス」を新たに理解し、そこから集団の闘争への道筋を見いだすための手がかりとなっています。

世界各地にはすでに注目すべき実践例があります。例えば、ブラジルの貧困地区(ファヴェーラ)では、ラディカルな精神分析家たちが「無料診療所」を立ち上げ、コミュニティの人々に耳を傾け、支援を行っています。そこでは、精神分析理論を世界の普遍的モデルとして押しつけるのではなく、人々自身の語りを尊重しながら実践が組み立てられています。また、パレスチナにおける精神分析の実践では、占領に対して語り、行動する人びとの自己信頼を築き上げる取り組みがなされています。

ブラジルには、ジャイル・ボルソナロ政権下で潜行するファシズムに抗する闘いの中で、公に活動してきた精神分析家たちがいます。ジャイル・ボルソナロは、熱帯雨林を焼き払い、最も貧しい人びとに最大の影響を及ぼしているコロナウイルスの存在を否認するだけでなく、標準的な「正常」な核家族から逸脱するあらゆるセクシュアリティに対して敵対的でもあります。これは驚くべきことではありません。精神分析家たちは、急進左派の政党とともに選挙に立候補し、また、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランス、クィアの運動の一翼を担う存在となっています。

パレスチナには、イスラエル国家による土地と精神の占領に対する抵抗を築き上げている精神分析家たちがいます。これは、連帯の絆と、パレスチナの人びとがもつ力に対する集団的な感覚を強めることを意味すると同時に、抵抗するという行為そのものを理由にパレスチナの人びとを病理化するような、精神分析的概念の反動的な利用に抗することでもあります。こうしたラディカルな精神分析家たちは、「バランス」という観念や、政治的闘争を「対話」へと解消し、抵抗する人びとを危険で狂信的な「急進主義者」として名指すような試みに対して、力強い批判を提示しています。

ラディカル精神分析の発展は、これらの多様な取り組みとの対話と共同実践のなかで進むでしょう。私たちは、疎外・搾取・抑圧に抗して語り、行動する新しい方法を探し続けます。そして、私たちの内にも、そして共に築く未

来の世界にも、今とは違う「異なる世界」への萌芽を見出しながら、共に創造していくのです。

【参考文献】

この小冊子で扱われた思想をより深く掘り下げたい方のために、以下の5冊をおすすめします。

Arruzza, C. (2013) *Dangerous Liaisons: The Marriages and Divorces of Marxism and Feminism*. London: Resistance Books. [イタリアのフェミニストであり社会変革者であるチンツィア・アルツツァが、理論と実践の両面においてフェミニズムとマルクス主義がいかに結びつき、また分かれてきたかを、明快に論じています。「クィア」的観点や精神分析的視点も含まれています。]

Fanon, F. (2017) *Black Skin, White Masks*. London: Pluto. [マルティニーク出身で、アルジェリアの反植民地主義闘争に関わった社会変革者であり、かつ急進的な立場をとる精神科医であったフランツ・ファノンとは、この古典的名著において精神分析の理論を援用し、人種差別について、そして抑圧がいかにして被抑圧者の生活の奥深くにまで浸透していくのかを論じています。]

Gherovici, P. (2017) *Transgender Psychoanalysis: A Lacanian Perspective on Sexual Difference*. London and New York: Routledge. [アルゼンチン出身で臨床に携わる精神分析家パトリシア・ゲロヴィチは、本書で「トランス」の経験から精神分析が学ぶうることを示し、臨床の場をより受容的で変容的なものにしていく可能性を論じています。]

Pavón Cuéllar, D. (2017) *Marxism and Psychoanalysis: In or against psychology?* London and New York: Routledge. [メキシコのマルクス主義者であり精神分析的著述家でもあるデイヴィッド・パヴオン＝クエヤルは、さまざまな形態のマルクス主義がどのように受け継がれ、また異なる形の精神分析へと統合されてきたのかを、詳細に論じています。]

Sheehi, L. and Sheehi, S. (2021) *Psychoanalysis Under Occupation: Practicing Resistance in Palestine*. London and New York: Routledge. [レバノン出身の活動家ラ・シーイとスティーヴン・シーイは、イスラエルによる植民地的占領という状況のもとで、精神分析がどのように機能しているのかを詳細に記述しています。そして、抑圧された人々と連帯する一冊の書物の中で、ラディカル精神分析がいかなるものであり得るのかを具体的に示しています。]

これらの「ラディカル精神分析」に関する思想をさらに探究し、次へと進めてください。追加の読書案内はこちらから確認できます：

<https://iiimg.com/2021/11/19/radical-psychoanalysis-reading/> (短縮リンクはこちら: <https://bit.ly/3Fxcrf2>)

【著者紹介】

イアン・パーカー氏は、イギリス、マンチェスターで臨床を行っている精神分析家であり、社会変革を目指すマルクス主義者でもあります。著作活動も行っており、主な著書に『*Socialisms: Revolutions Betrayed, Mislaid and Unmade*』(2020年、Resistance Books)や、メキシコの社会変革者デイヴィッド・パヴオン＝クエヤルとの共著『*Psychoanalysis and Revolution: Critical Psychology for Liberation Movements*』(2021年、1968 Press)などがあります。

【謝辞】

本書は、2022年にResistance Books社より出版された『*Radical Psychoanalysis and Anti-Capitalist Action*』の全訳です。このような形での出版をお認めいただいた、イアン・パーカー氏、そしてResistance Books社に深く御礼申し上げます。

Title:

Radical Psychoanalysis and Anti-Capitalist Action

Author(s):

Ian Parker¹⁾ (translator: Hidemoto Makise²⁾)

Address(es):

¹⁾Institute of Education, University of Manchester,
Oxford Road, Manchester, M13 9PL, UK

²⁾College of Life and Health Sciences, Chubu
University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi
487-8501, Japan

Keywords:

Radical Psychoanalysis,

Anti-Capitalist Action,

Lacanian Psychoanalysis

Abstract:

Politicians of all stripes now talk about ‘mental health’. They tell us how they have suffered, and promise more resources to put things right. At the same time, welfare services are being cut, people are told to sort problems out for themselves, and the state is beefed up to deal with dissent. With increasing misery comes increasing anger, some of it directed at capitalism and some of it turned around against ourselves, even into ourselves, so this sick system also makes us sick. Energy that could overthrow this rotten system is turned around to sabotage our collective struggles for a world beyond capitalism. Mainstream ‘mental health’ and ‘wellbeing’ programmes are too-often focused on making us change our thoughts, urging us to be happy, and fit in. But there is an alternative. The alternative comes through political action, through anti-capitalist resistance and many other political struggles, and this is where radical psychoanalysis can be our ally. But to make it our ally we need to know what it is and what it could be. Another world is possible, and psychoanalysis opens up possibilities for personal and political change.